

労働者協同組合（ワーカーズコープ）が取り組んでいる「共に働く、地域をつくる」協同労働・よい仕事の実践に注目が集まり、その実践を語る機会がこの間連続している。1月26日には全労済協会主催「格差・貧困の拡大の原因と是正施策に関する研究会」（座長：宮本太郎中央大学教授）で「『共に働く、共に生きる、地域をつくる』労働者協同組合の社会的使命と実践～生活困窮者の増加とワーカーズコープにおける新しい働き方～」、また2月19日にはJC総研「協同組合の職員の地位と役割研究会」（座長：堀越芳昭山梨学院大学元教授）で「労働者協同組合（ワーカーズコープ）における組合員の地位と役割～運動事業の歴史と組合員アンケート結果を踏まえて～」を報告させていただいた。また、3月4～5日の「全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in 東京」（駒澤大学）に、ワーカーズコープの仲間が報告者やコーディネーターとして参加し、3月25日の共同連主催「社会的事業所研究集会 in 名古屋」のシンポジウム「ワーカーズコープ、ワーカーズ・コレクティブ、そして社会的事業所」、3月27日の生活クラブ共済連のシンポジウムに報告者として参加する。

「協同労働の協同組合」が取り組む地域づくりや就労の場などの居場所づくりに対して、社会的な期待の高まりを実感すると共に、持続可能な地域づくりの普遍的なモデルになり得る可能性を帯びているのではないかという評価が確実に広がっているよ

うに感じている。ワーカーズコープの事業の領域・舞台が、個別の分野、個別の事業でよい仕事をめざす段階から、生活と地域まるごとを対象にして、地域の人びと自身が協同労働で仕事をおこし、地域を創るといった新たな段階を迎えていると言えるのではないだろうか。

先行事例として、センター事業団恵庭地域福祉事業所が地域のたまり場をつくり、そこに集う住民たちが主体的に地域課題の解決に取り組んでいる姿、千葉県佐倉市の高齢化した自治会がその再生を進めるために、自治会を母体にしたワーカーズコープの立ち上げの準備に向かうための地域セミナーが開始し70人の住民が参加していること、山梨県のある町で、地域のニーズに代わってワーカーズコープが自治体から地域づくりへの期待を受けて丸ごとの地域づくりに向かう取り組みが開始されようとしていること。さらに、全国各地で取り組んでいる子ども食堂やフードバンクなど、地域住民や自治体、町内会とその願いに寄り添い、地域課題を共に共有しながら、仕事おこしや地域づくりに共に取り組む実践が深まっている。

それらは「人びとが人間らしく生きていくための生存条件を、自らの手で多様に豊かに創り出していく取り組み」（宮崎隆志北海道大学教授）と評価いただき、私たちは「決して一人じゃない」「そこに行けば何と

かなる」「困ったときに、相談できる」と感じられるような居場所－生きづらさを抱えたままでも生きていける地域と社会－「今、ここに、共に、生きる」ための共同体を、地域の力を合わせて多様に創り出すことが必要だと捉えるに至った。

2月25～26日、労協連は「全国よい仕事研究交流集会2017」を開催し、全国70本の

実践レポートを基に協同労働・よい仕事の到達段階と可能性をみんなで確認するとともに、全国の仲間の実践に触れ、学び、交流し、今後の実践の飛躍に生かしていきたい。

会員研究者の皆さんの参加をお願い致します。